

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 13 NO. 2

(通巻49号)

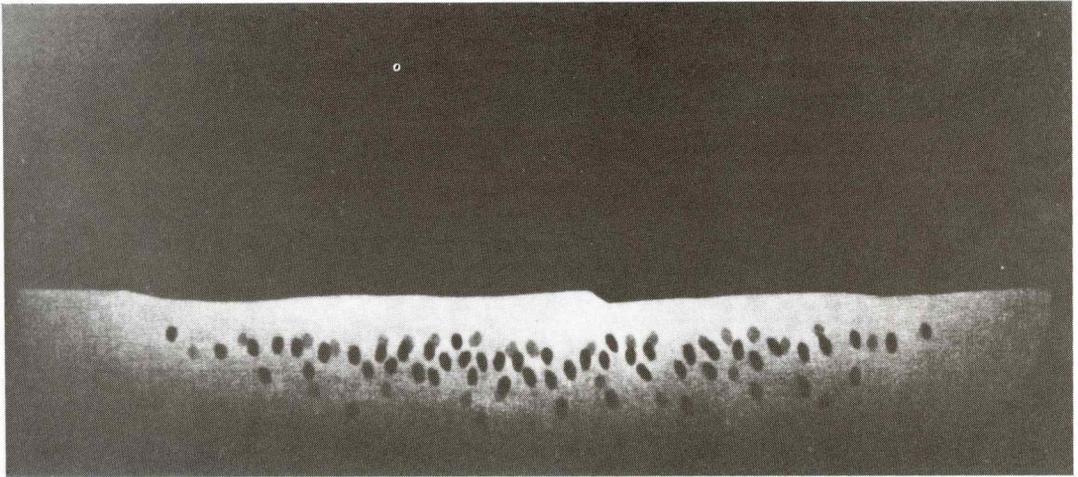
昭和61年7月15日発行

編集・発行人 平野 馨

〒260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎0472-42-8311 (代表)



浜口陽三 「西瓜」

一九八一年
カラーメゾチント

斜陽のヨーロッパに興味がなくなったという浜口陽三は、四十年近く住んだパリを離れ一九八一年にサンフランシスコに移住、新境地で制作を続けている。パリを去る前に制作したこの作品は、一九八二年の北カリフォルニア版画大賞展に出品し、グランプリを受賞した。この受賞は、パリから移ってきたばかりの浜口を大いに喜ばせた。もともと、東京、サンパウロ、ルガノ、リュブリアナと次々に国際版画展で受賞を重ね、アメリカにおいても、一九六一年にニューヨークで大きな個展が開かれて以来、ワシントンやシカゴなどで個展を開催し、浜口の名はすでに世界に広まっていたのであるから、受賞は当然のことといえるだろう。

一九五五年に浜口が最初に手がけたカラーメゾチントの作品も西瓜のモチーフであった。そのころの緋のような網目はなくなり、すでになじみとなっている浜口の深く、美しい黒い闇の中から、もえるような赤い西瓜が浮かびあがって、一つの静寂な空間を創造

している。その赤は、かすかな緑に縁どられて、いつそう鮮やかである。西瓜は、大変に抽象的でシンプルな形をとっている。西瓜の断面は、地平線のように横に広がっている。西瓜は食欲をそそる果物というよりももっと存在感のある、一つの生命を感じさせる。

浜口の作品には、モチーフとして「さくらんぼ」、「ぶどう」、「や」とんとう虫」などがよく使われる。簡潔な構図のうちには、「さくらんぼ」や「ぶどう」のつぶが、リズムや動きのバランスをとっているのだが、ここでは、黒い種のみが、熟した果肉の中に生きもののようにうごめいている。

一九八三年、ニューヨークとサンフランシスコで「メゾチントの巨匠・浜口陽三展」が開かれ好評を博した。また、同年サンフランシスコ市長より「市の鍵」を授与された。カリフォルニアの明るく、温暖な風土と人間に囲まれ、ますます円熟した浜口芸術の生みだされることを世界のファンが楽しみにしているのである。

浜口さんの魅力



深沢幸雄

昨年は浜口さんと対談の機会があった、本邦初公開とも言うべき技法のお話など拝聴できたり、僕の発明？したメゾチントのベルソーをわがア

トリエまで見にいらしたので、望外に幸せな年になった。卒直に言つて浜口さんの主要なモチーフ、桜桃一つ、てんとう虫一匹などと言うのは、

何だか少女趣味の様で、僕にはテレクサくて描けない様な気がしていた。

勿論絵画芸術たるや、己の精神を描こうとしている訳だから、題材は石ころだって何だつてかまわない訳で、それは百も承知していながら、ついそう思ってしまうところが私にはある。

だが浜口さんは、それら小さな桜桃やてんとう虫から、前人未踏の深く豊かな魂の歌をうたいあげて全世界を驚嘆させたのである。否、桜桃一個、てんとう虫一匹を描くことの凄みを知らしめたと言つて良い。

漆黒の背景にかび上つて、艶やかに息づく精緻な静物たち、その深い抒情。これこそ浜口さんの心の、魂の魅惑そのものでなくて何であろう。そしてお逢いしたホンモノの浜口さんは、やはり作品と同

様に、優しく、奥深く、繊細な情感を漂わせる芸術家であった。

浜口さんを車で僕のアトリエまでお連れになつた方が二人、ホツとした様に、今日はよくまつすぐにここまで来られたナアと話されていたので、地図が無かつたですかと僕は問う。だが、それは地図の有無などと言ふことでは無かつたのである。

例えば浜口さんと車に乗つて行く。目的はある。ところが変つたものが見える、オヤあれは何だ、おりてみよう、何？小湊鉄道、フォーム終点まで行つてみるか。と、この様な具合になるらしいのである。

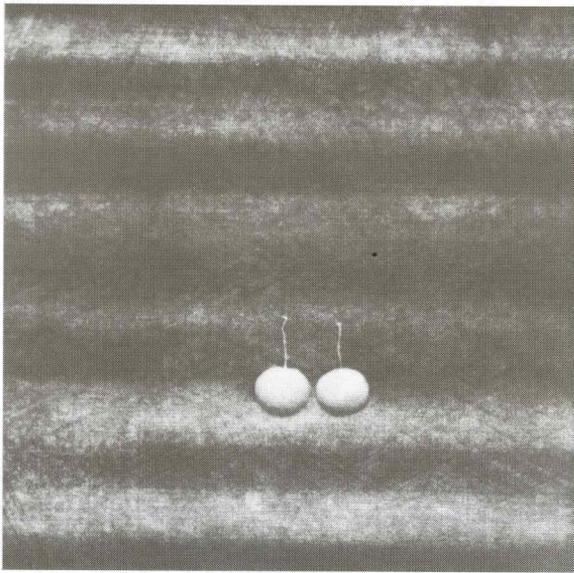
この子供の様な好奇心、それを一貫してもち続けてきたこのすばらしさ。浜口さんの作品に一貫して流れるみずみずしさも、おそらくこの天使の様な童心から生まれてきた

ものだろう。

浜口さんは僕のメゾチントは正規のものではありませんよと微笑される。正規のメゾチントとは何か、それは銅版全面にベルソーと言ふ道具を使って、サンドペーパーの様な精緻でザラザラの面をつくり、それを削り、磨いて版を作る方法である。誰もが当然浜口さんもこの技法を踏襲しているものと思つていた。その技法の神様だと思つていた。

ところが浜口さんはそんな四角四面の約束ごととは縁が無い。全く自由に自己流にベルソーを使う。ベルソーで描く様に自在にあやつる。何にも縛られない自由人の巨きな魂だ。当然のことながら重ねて浜口芸術のたぐいえない魅力、それはもう浜口さんの人間そのものの魅力なのである。

童心、自由な魂、深い歌等等。(顔写真は深沢幸雄氏)



「2つのさくらぼ」 浜口陽三 (1957)



「海辺の光景」 齊藤捷夫

今年度の収蔵作品展第Ⅱ期は、4部に分けて構成します。
第一部では「水のある風景」をテーマとして、日本画・洋画・水彩画を展覧します。水の表現方法は、日本画・洋画など各手法によっていろいろな特徴があり、色を塗り重ねる時の工夫や道具を使い分けることにより幅広い表現が可能になります。また作品の構図や色の配置の仕方などに作家の練達した表現力や鋭い感性を窺うことができます。精神的

昭和61年度 常設 収蔵作品展Ⅱ期

みる (展覧会)

にも物理的にも人間の生活に深く浸透し、深い関わりを持つ水の、モチーフとしての魅力をその表現と共に御鑑賞頂きます。
主な展示作品
 ○日本画 吉岡堅二「溝」
 関主税「潤声」、若木山「池の春」○洋画 石井柏亭「安倍川」、氏家次郎「海辺」、齊藤捷夫「海辺の光景」、小堀進「セーヌ川」ほか。

第二部は今年度、新しく収蔵した作品を紹介するコーナーです。本館では作品の収集計画をたて、その方針に沿って収集を進めています。Ⅱ期では日本画・洋画やガラス・漆・象嵌・彫金などによる工芸の新収蔵品の展示を予定しています。



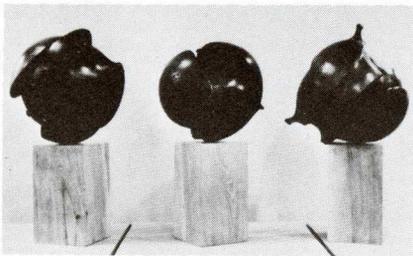
「兵士」 浅井 忠

本館では、日本の近代洋画の先駆者、浅井忠の作品及び背景資料の収集と研究を課題のひとつとしてきました。
第三部では、今年度Ⅰ期に引き続き、その作品と背景資料

第四部では、「素材と表現」をテーマに彫刻を展示します。彫刻を木・ブロンズ・石に大別し、他にアルミ・強化ポリエステル樹脂の作品も展示します。木は産する風土や地形の影響で、木目・膨張率・肌のきめ・色彩・光沢などに個性があり、石も同様、硬さ・

料を紹介いたします。今回は日本画・洋画・水彩・工芸・彫刻の各作品をはじめ教科書の挿絵の下書きとなった習作や素描・浅井が槐庭と称していた頃の習作・滞欧時代の模写・スクラップ帳類のほか、滞欧中の浅井の友人達から浅井に送られてきた絵葉書類も紹介します。

光沢・脆さ・ねばりなど、生成の仕方により個性があります。それら天然の素材の癖を理解して生かす工夫と表現、またブロンズのように自由な形態に塑造できたり、緑青や着色の容易な性格を利用した表現を御覧頂きます。
主な展示作品
 安西順一「秋晴」、堀川恭「丸いフォルム」、三木俊治「行列」、大国丈夫「ヨガ」、山崎英五「地を這う者どもⅫ」、青木三四郎「憩い」、梅原正夫「なかよし」ほか。



「丸いフォルム」 堀川 恭

7/25 ~ 10/19

「あんない・団体展」

- 第4回明日を拓く教育美術展 7月1日～7月6日
- 水彩連盟千葉支部展 7月1日～7月6日
- 第18回千葉市水墨画同好会連合展 7月8日～7月20日
- 第56回習美会初夏展 7月22日～7月27日
- 第7回龍峽書道会千葉県人展 7月22日～7月27日
- 日本水彩画会千葉支部展 7月22日～7月27日
- 第6回中央美術協会千葉支部展 7月29日～8月3日
- 第6回千葉サンケイ現代洋画展 7月29日～8月10日
- 第15回写真千葉県展 8月5日～8月17日
- 第10回尺墨会書作展 8月12日～8月17日
- 第16回いてふ会彫刻展 8月12日～8月24日
- 第11回子供と教師の作品展 8月19日～8月24日
- 第6回日本春秋書院書道連盟展 8月19日～8月24日
- 第14回千葉市教職員美術展 8月26日～8月31日
- 刻字千葉展 8月26日～8月31日

特別展

昭和61年度国立美術館所蔵美術名品展

浜口陽三展

'86・8・16(土)〜9・15(月)

静寂の詩・メゾチントの巨匠

序

本県ゆかりの国際的版画家浜口陽三の作品を展覧し、すぐれた版画芸術を鑑賞していただく機会として開催します。また同時に本特別展では、国際文化交流に果した浜口陽三の功績を顕彰し、広く県民各位に紹介したいと願っています。

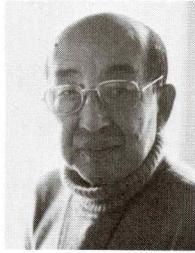
一、画家の血脈

浜口陽三は、一九〇九年(明治42)4月5日和歌山県有田郡広村(現広川町)に10人兄弟姉妹の三男として誕生。生家は代々醤油醸造業を営み現在にいたっています。画家となる環境を系譜に求めると、5代目浜口灌圃は紀州藩絵師野呂介石の五俊に数えられた南画家。父の10代目儀兵衛(梧桐)も小室翠雲に南画を学び美術を愛しました。浜口陽三が少年時代住んだ銚子市末広町3番地の4の屋敷には、杉皮張りの梧桐氏の画室が現在

も遺っています。

二、ふるさと銚子

浜口陽三は一九一五年(大正4)6歳の時銚子に移住。小学校時代の多感な時期を末広町の屋敷で過しました。この屋敷は武家屋敷を移築したものです。浜口家の隣接地にあ



撮影ムードン・エルダー氏

った興野小学校に通学。自宅のほか少年時代のたぐずまいを伝えるのは、ヤマサ醤油本社の右隅のレンガ造りの醤油室だそうです。レンガ壁の道の奥に現在の興野小学校が移転してあります。

だれにでも懐しい風景があります。銚子は浜口陽三にとって「ふるさと」が実感できる土地なのです。父や叔母夫

婦の関係から牧野虎雄、小林万吾、建畠大夢、片岡銀蔵、梅原龍三郎ら芸術家と知り合、小学校6年の時には、片岡銀蔵の指導で初めて油絵を描きました。

浜口家の裏に川があり、復興橋を渡ると新生町2丁目1番地。ここが銚子の隠れた名所。一九八三年(昭58)11月6日銚子市公正市民館の一部を改造し「浜口陽三版画展示室開設式」が挙行されました。(開室は毎週日曜日午後1時から4時まで)この式の日長

兄で11代目当主の浜口儀兵衛翁(現ヤマサ醤油(株)相談役)に伺った話ですが、「結局こうしてみると陽三が一番親孝行をしたと思います」と話された後、浜口陽三にとってどこがふるさとなのかと質問したところ「陽三は帰国して総武本線を通って帰ってくる時飯岡のトンネルを通過し、抜け出た時、銚子に帰ってきたと実感

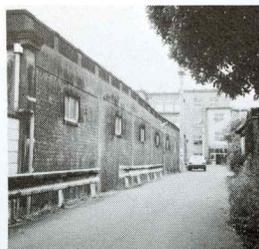
すると言っていた」という話を御教示いただいたことが印象深いです。先年朝日新聞夕刊に連載の「新人国記'83」千葉県の部で長兄儀兵衛翁とともに「銅版画としようゆ」として紹介の記事がありました。この中で浜口陽三は「銚子の海や利根川河口の広々とした眺めは大好き。スイスのような山国は息が詰まり1週間とられない」と語っています。浜口陽三の作品の背景に浮び上っているメゾチントのピロイドのように艶やかな黒の色調を浜口自身「この漆黒の空間こそ精神の原風景」銚子の漢々たる海原の表徴」だと述懐しています。フランス語でマニエル・ノワール(黒の技法)と呼ばれる魅力的な黒の色調の奥の奥に浜口陽三の「ふるさと」をみつけることができるというのは、大変興味深いことです。

三、画業

一九二七年(昭2)東京美術学校塑像科に入学。美校のアカデミックな教育に反発し



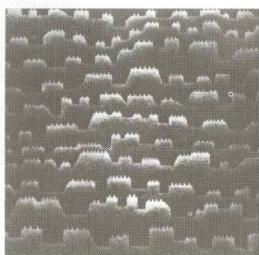
公正市民館「浜口陽三版画展示室」



醤油室のレンガ壁と興野小学校

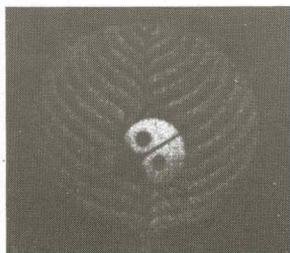


少年時代暮した末広町の屋敷



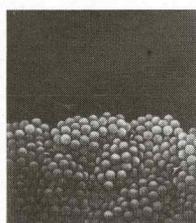
パリの屋根

「ばかばかしくなり学校をやめ」梅原龍三郎の助言により渡仏。「もともと私は幼い頃から学校とか集団が嫌いでした」。以来独学。第二次世界大戦で一時帰国し、戦後一九四八年(昭23)本格的に銅版画を始め、数年後にはメゾチントの作品が多くなります。一九五三年(昭28)44歳の時再び渡仏。パリに着いた夜、カフェレストランで藤田嗣治(本県館山市ゆかりの画家)の最初の夫人だったフェルナンド・パレとその友人ら昔の仲間と再会。同時に画商ベルグリンとの運命的な出会いにより支持を受けることになりました。この出会いを「人間百パーセント運ですからね」と語っています。この言葉は浜口陽三の画家としての血統・資質、才能と努力など実力が運を呼び込んでいったことの逆説的表現ではないでしょう。



てんとう虫

か。百パーセント独学の画家の「百パーセント運」と言い切れる自分を信じる心の強さを感じます。
同年駒井哲郎らと「日本銅版画協会」を設立。一九五五年(昭30)頃からカラー・メゾチントで制作を始めます。版画の主題は、葡萄、さくらんぼ、レモン、西瓜、ピーマン、てんとう虫、魚、蟹、貝、毛糸などの静物。パリの屋根など風景画。日常身近にあるごくありふれたものの存在と美が凝縮された画面。
一九五七年(昭32)サンパウロ国際ビエンナーレ展で版画大賞を受賞。第1回東京国際版画ビエンナーレ展で東京国立近代美術館賞を受賞。以来ルガノ国際ビエンナーレ展をはじめとする国際版画展で数多くの賞に輝き、世界の浜



暗い背景のぶどう

口陽三として脚光を浴びたことは周知のとおりです。
浜口陽三がカラー・メゾチントの技法を発展させたことは世界的な百科辞典エンサイクロペディア・ブリタニカの「メゾチント」の項に明記されています。技法や歴史の記述の後「メゾチントの技法を用いている20世紀中葉のほとんど唯一と評している作家は浜口陽三で、このパリ在住の日本人作家は、カラーメゾチントの新しい技法を開拓した」と紹介しています。
一九八一年(昭56)浜口陽三は、パリからアメリカのサンフランシスコに移住しました。エッセー「パリと私」の中で25歳のスペインの旅の回想に「海辺で育った私は海を見る心が安まります。潮風の香りのないパリに時々淋しさを感じます」とある文章がオーバーラップしてきます。

四、展示内容

この特別展は、文化庁、国立国際美術館と共催して実施します。国立美術館所蔵美術名品展として全国4会場を巡回します。その最初の開催地が浜口陽三ゆかりの千葉県です。展示内容は、2部構成です。
第一部国立国際美術館所蔵の浜口陽三の版画126点(全国を巡回)。
第二部特設コーナー。もう一つのふるさと、誕生地の和歌山県(和歌山県立近代美術館等)と地元千葉県(銚子市教育委員会・公正市民館、当館等)の浜口陽三にゆかりの両県の関係者が協力して、所蔵作品中から主として初期の作品を中心に選んだ37点を、当館だけで特別に公開します。
1部、2部で計163点により世界の巨匠浜口陽三の創造した美の世界の全貌を紹介いたします。どうぞこの機会に多くの方々に御覧いただくことを願っています。

●美術講演会

日時 8月24日(日)午後2時

演題 「浜口陽三の版画」

講師 三木多聞氏(国立国際美術館館長)

●第二回美術を語る会

日時 9月14日(日)午後2時

話題 「浜口陽三の表現方法」

話題提供者 深沢幸雄氏

(版画家)

特別展 「ヨーロッパ近代絵画の 巨匠たち」展 盛況

今回の特別展は6月13日から7月18日まで開催されている。19世紀から20世紀前半のフランスを中心に隆盛した印象派からエコール・ド・パリまで、30作家70点の作品が展示され、また、外国の美術館などからの出品もあり、多様な展観となった。

出品作家が一般的なため会期中の入場者も多く、特に、6月15日の「県民の日」は入場無料となり、6千人という記録的な入場者数に達した。また、講演会(6月29日「印象派以後の絵画」富山秀男氏・東京国立近代美術館次長)、美術を語る会(7月13日「私の好きな巨匠たち」松沢茂雄氏・洋画家)も開かれ、多くの参加者があった。



◆版画入門講座

期日 8月3・5・6
7・8・9・10
日 <7日間>

講師 平野正房氏

定員 30名

申込締切 7月17日



60年度講座から(版画)
◆陶芸研修講座

期日 9月2・5・30
日 10月3・7
・31日 <6日間>

講師 三橋英作氏

定員 30名

申込締切 8月19日

◆金工入門講座

期日 9月9・10・17
・18・19日 <5日間>

講師 佐藤叔孝氏
定員 15名

申込締切 8月25日

◆洋画研修講座(3)

期日 9月18・19・25
・26日

講師 天野三郎氏

定員 30名

申込締切 9月4日

◆七宝焼入門講座

期日 9月27・28日

講師 金光惇子氏

定員 30名

申込締切 9月13日



ごあんない・実技講座

60年度講座から(七宝焼)
★受講希望者は往復はがきに、講座名・住所・氏名
電話番号を明記のうえ、
美術館普及班あてお申し
込みください。

美術館夏季大学

本館における教育普及活動の一環として企画し、本年度は、「美術における東と西」というテーマで、二回に分けて実施する。

○第一回、6月22日(日)

「日本絵画における洋風の影響」―細野正信氏

情報資料室だより

資料室では、特に当館収蔵作品に関連する資料の収集に努めています。一例として、今回は当室で所蔵する浜口陽三関係の主な資料を紹介いたします。

版画集

○日本の名画50 浜口陽三

(講談社)

○浜口陽三全版画(M・ギ

ャラリー)

個展図録

○浜口陽三名作展(会場・

池田二〇世紀美術館)

○浜口陽三展(会場・西武

美術館・国立国際美術館)

浜口陽三研究文獻

図書

「二十世紀のアメリカ絵画―近代から現代へ―」―村木明氏

109名の参加があり盛況のうちには終了した。

○第二回は、9月7日(日)

午前10時、「水墨画における中国と日本」東京大学教授戸田祐植氏。午後2時、「都市と彫刻」埼玉県立近代美術館長本間正義氏。

美術館研究員会議

今年度の美術館研究員10名が委嘱され、第一回会議が7月5日(土)午前10時より開かれた。研究員は美術館の専門的・技術的な事項に関する研究を行うため置かれており、今年度は、浅井忠「徒征画稿」の翻刻及び解説・凡例等を補足して、資料の整理・活用をはかり出版に向け努力することとした。

なお、研究員は、池田伊予、石倉総子、加曾利和夫、平戸美和子、佐藤修、高木正、田邊宏、南隆一、村田哲朗、綿貫啓一の各氏である。

日誌抄

6・3 友の会役員会

6・13 特別展「ヨーロッパ近代絵画の巨匠たち」(7月18日まで)

6・22 美術館夏季大学(講師―東京国立博物館建築室長細野正信氏、美術評論家村木明氏)

6・29 第一回美術講演会(講師―東京国立近代美術館次長富山秀男氏)

7・13 第一回美術を語る会(講師―洋画家松沢茂雄氏)

7・13 第一回美術を語る会(講師―洋画家松沢茂雄氏)